

第六部 インマヌエルの書 ⑤

「インマヌエル（神が我らと共におられる）」とは、メシア（キリスト）を指す呼称のひとつ。イザヤ書の中で、メシアを「インマヌエル」と呼んで預言している一連の部分を、神学上、「インマヌエルの書」という。イザヤ書の 7 章から 12 章まで。

□第六部のアウトライン C)、D)、E) はイザヤ親子の名と関連する預言 (8 : 18)

A) インマヌエルのしるし (処女から生まれる) 7 : 1～25

B) インマヌエルについての 4 つの預言 8 : 1～9 : 7

C) 神の伸ばされた御手 9 : 8～10 : 4
(神がアッシリアを用いて北イスラエルを裁く)

D) アッシリアに対する裁き 10 : 5～34
(レムナントについての預言を含む)

E) **インマヌエルによる統治** 11 : 1～12 : 6

次男マヘル・シャラル・ハシュ・バズ
【分捕り物はすばやく、獲物はさっと】

長男シェアル・ヤシュブ
【残りの者が帰って来る】

父親イザヤ 【主は救い】

□E) インマヌエルによる統治 のアウトライン (イザヤ 11 : 1～12 : 6)

B) インマヌエルについての 4 つの預言 では、その締めくくり、9 章 7 節は、インマヌエルと呼ばれるお方が王となり、イスラエルのみならず、全世界の王となってこの地上に正義と平和をもたらすという預言であった。

9 : 7 その主権は増し加わり、その平和は限りなく、ダビデの王座に就いて、その王国を治め、さばきと正義によってこれを堅く立て、これを支える。今よりとこしえまで。万軍の主の熱心がこれを成し遂げる。

この預言の続きとなるのが、E) インマヌエルの統治 イザヤ書 11 章と 12 章である。そのアウトラインは次のとおり。

1. 王となるメシアは、どういうお方か (11 : 1～5)
2. メシアの王国は、どういう国か。特に動物界と諸国民について (11 : 6～10)
3. メシアの王国で、イスラエル民族はどうか (11 : 11～16)
4. イスラエルが主を賛美するときの歌【歌詞は 1 番と 2 番】 (12 : 1～6)

E) インマヌエルによる統治 11 : 1～12 : 6

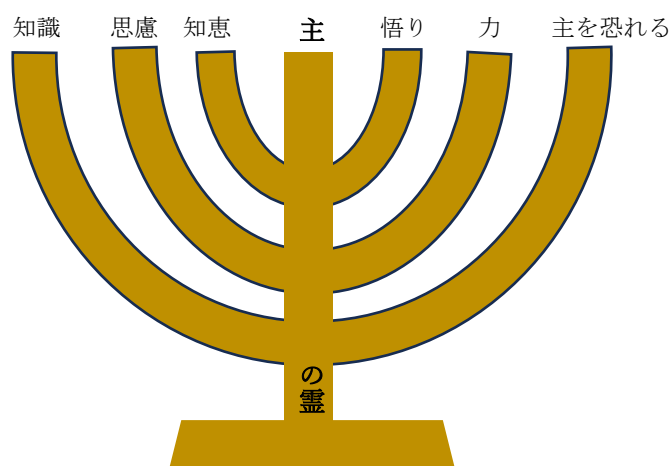
1. 王となるメシアは、どういうお方か (11 : 1～5)

1 節 エッサイの根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶ。

- エッサイ・・・ダビデ王の父親の名。エッサイは、貧しい羊飼ひ。住んでいた町は、ベツレヘム。
- 根株・・・木が切り倒されて、切り株だけになっている状態。ダビデ王の家系とはいえ、没落して貧しくなっている状態を示す。
- 新芽が生え、若枝が出て実を結ぶ・・・根株から生え出て来る「新芽、若枝」と表現されているのは、メシア。メシアは、ダビデ王の家系から生まれるが、誕生したときには没落して貧しい家になっている。しかし、メシアは実を結ぶ。

2 節 その上に主の霊がとどまる。それは知恵と悟りの霊、思慮と力の霊、主を恐れる、知識の霊である。

- 主の霊・・・神の霊、聖霊、御霊。「三位一体の神」の第三位格なる神。
- 知恵と悟りの霊・・・メシアの理性面。知恵は、正しい判断を適時に下すことができ、それによって行動する力。悟りは、いろいろな選択肢の中から最も正しい選択をする力、識別力や洞察力を含む。
- 思慮と力の霊・・・メシアの実生活面。思慮は、知恵によって得られた正しい結論を実現するために、状況に応じて最適な計画を立てることのできる力。力は、計画したことを粘り強く実行していく能力。
- 主を恐れる、知識の霊・・・原文は「知識と主を恐れる霊」。メシアの霊性面。知識は、経験に裏打ちされた見識である。特に、神とともに歩んできた経験による霊的な見識であり、愛の実践に関係する見識である。主を恐れるとは、神を神として畏敬する態度である。



3～5 節 この方は主を恐れることを喜びとし、
 その目の見るところによってさばかず、その耳の聞くところによって判決を下さず、
 正義をもって弱い者をさばき、公正をもって地の貧しい者のために判決を下す。
 口のむちで地を打ち、唇の息で悪しき者を殺す。
 正義がその腰の帯となり、真実がその胸の帯となる。

- 主を恐れること、神を神として畏敬することが、統治のベースになる
- 表面的なことで判断せず、正義と公正、すなわち内面的な義に照らして裁きを行う
- さばきにあたっては、弱い者、貧しい者のために
- 悪しき者とは、メシアの王国に入った諸国民の次世代以降の人で、100 歳になるまでに神への信仰を持たず、救いを受け取らない人たち。メシアが唇の息で殺すとは、メシアがその人の死を宣告すると、その人は死ぬということ。イザヤ 65 : 20
- メシアが腰・胸に帯を締めているとは、立ち向かってくる敵に対していつでも戦えるように準備している、ということ。

2. メシアの王国は、どういう国か。特に動物界と諸国民について (11 : 6～10)

6～9 節 狼は子羊とともに宿り、豹は子やぎとともに伏し、子牛、若獅子、肥えた家畜がともにいて、小さな子どもがこれを追って行く。雌牛と熊は草をはみ、その子たちはともに伏し、獅子も牛のように藁を食う。乳飲み子はコブラの穴の上で戯れ、乳離れした子は、まむしの巣に手を伸ばす。わたしの聖なる山のどこにおいても、これらは害を与えず、滅ぼさない。主を知ることが、海をおおう水のように地に満ちるからである。

- 神が創造した動物界は、本来、草食であり、肉食動物はいなかった。しかし、最初の人アダムが罪に堕ちたことで、動物界も呪いを受けて、動物の一部が肉食に変わった。メシアの王国では、動物界への呪いが取り除かれ、肉食動物が草食に戻る。
- 主を知ることが地に満ちるとは、地上の人々が主のことば、主の命令に従うということである。人間が神に従うとき、動物たちは人間に従う。
- 「わたしの聖なる山」とは、エルサレムを指すのか、それとも、山は王国、王座、あるいは王を象徴するところから、メシア王国全体を指すのか。肉食動物が草食になるのは、エルサレムだけでなく、地上の全域でそのようになるとするなら、メシア王国全体を指すと考えられる。

10 節 その日になると、エッサイの根はもろもろの民の旗として立ち、国々は彼を求め、彼のとどまるところは栄光に輝く。

- エッサイの根・・・メシア。もろもろの民・・・イスラエル民族を除く世界の諸国民。旗として立つ・・・旗は、人々がそこに集まって来るための目印であり、人々に集まれという知らせでもある。
 - よって、メシアが世界の諸国民に従わせるという意味である。創世記 49：10 の預言「諸国の民は彼に従う」の成就である。
 - パウロは異邦人への宣教活動について、この箇所を適用し、「メシアが異邦人を治めるために立ち上がる」としている（ロマ 15：12）
- 国々は彼を求め・・・ロマ 15：12 では「異邦人はこの方に望みを置く」パウロはイザヤの預言を、異邦人への宣教活動に適用している

3. メシアの王国で、イスラエル民族はどうか（11：11～12：6）

11～12 節 その日、主は再び御手を伸ばし、ご自分の民の残りの者を買取られる。彼らは、アッシリア、エジプト、パテロス、クシュ、エラム、シンアル、ハマテ、海の島々に残っている者たちである。主は国々のために旗を揚げ、イスラエルの散らされた者を取り集め、ユダの追い散らされた者を地の四隅から集められる。

- 再び（二回目）・・・イスラエルの帰還は、2回にわたる。1回目は不信仰の中での帰還（エゼキエル 20：33～38、22：17～22、36：22～24、ゼパニヤ 2：1～2）。第 2 次世界大戦下でのホロコーストを経て 1948 年イスラエル建国となった。これは 1 回目の帰還である。2 回目は大患難期の末期にイスラエルが民族的救いを受け、信仰ある民となつての帰還である。

13～14 節 エフライムのねたみは去り、ユダに敵する者は断ち切られる。エフライムはユダをねたまず、ユダもエフライムを敵としない。彼らは西の方、ペリシテ人の肩に飛びかかり、ともに東の子らからかすめ奪う。彼らはエドムとモアブにも手を伸ばし、アンモン人も彼らに従う。

- エフライム＝北王国イスラエル、ユダ＝南王国ユダ
- イスラエル民族は、もはや二つに分裂したり、敵対したりしない。いっしょに協力して、周囲の他民族に従える。

15～16 節 主はエジプトの海の入江を干上がらせ、また、その焼けつく風の中で、御手をその川に向かって振り動かし、それを打って七つの水無し川とし、履き物の

ままで歩けるようにする。残されている御民の残りの者のために、アッシリアから大路が備えられる。イスラエルがエジプトの地から上って来た日に、イスラエルのために備えられたように。

- エジプトの海の入り江＝紅海の北西の入り江。スエズ湾にまでつながっている。イスラエルに向かうときに渡るのに苦勞するところであるが、そこが干上がる。
- その川＝ユーフラテス川。大河ユーフラテス川が七つの小さな川に分けられ、さらに熱風により川が涸れて、水無し川となる。
- 南のエジプト、東のメソポタミアから、その地域に離散していたイスラエルの民が、川に阻まれることなく、容易に帰還できる。
- アッシリアから大路が備えられる・・・「大路」とは、一般的な通路ではなく、石や土を盛って一段高くし路面を突き固めるなどして、一直線に整備された特別道。現代の高速道路のようなもの。

4. イスラエルが主を賛美するときの歌【歌詞は、1 番と 2 番】(12 : 1～6)

【歌詞 1 番】 1～3 節

その日、あなたは言う。

「主よ、感謝します。あなたは私に怒られたのに、あなたの怒りは去り、私を慰めてくださったからです。」

見よ、神は私の救い。私は信頼して恐れない。ヤハ、主は私の力、私のほめ歌。私のために救いとなられた。

あなたがたは喜びながら水を汲む。救いの泉から。

【歌詞 2 番】 4～6 節

その日、あなたがたは言う。

「主に感謝せよ。その御名を呼び求めよ。

そのみわざを、もろもろの民の中に知らせよ。御名があがめられていることを語り告げよ。

主をほめ歌え。主は素晴らしいことをされた。これを全地に知らせよ。

シオンに住む者よ。大声をあげて喜び歌え。イスラエルの聖なる方は、あなたの中におられる大いなる方。」

- 最後の二重下線部の歌詞を、原文の語順で直訳すると・・・

なぜなら大いなることよ あなたのただ中におられる イスラエルの聖なる方が
まさに「インマヌエル（神が我らと共にいる）」をもって、賛美が終わる